

## 041 安息日に麦の穂を摘む

マタイによる福音書 12 : 1~8、マルコによる福音書 2 : 23~28、ルカによる福音書 6 : 1~5

01 そのころ、ある安息日（→金曜日の日没~土曜日の日没）にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。

→麦の穂を摘むことは仕事であり、安息日の規定違反だと、ファリサイ派（→律法を守ること、特に安息日や断食、施しを行うことや清めの儀式を強調した）の人たちは考えた。

→イスラエルでは空腹の旅人が畑を通り過ぎるとき、慣習上、麦の穂を摘んで食べてもよいと考えていた（申命記 24 : 19~22）。

→ルカによる福音書 6 : 1

ある安息日に、イエスが麦畑を通して行かれると、弟子たちは①麦の穂を摘み、②手でもんで③食べた。

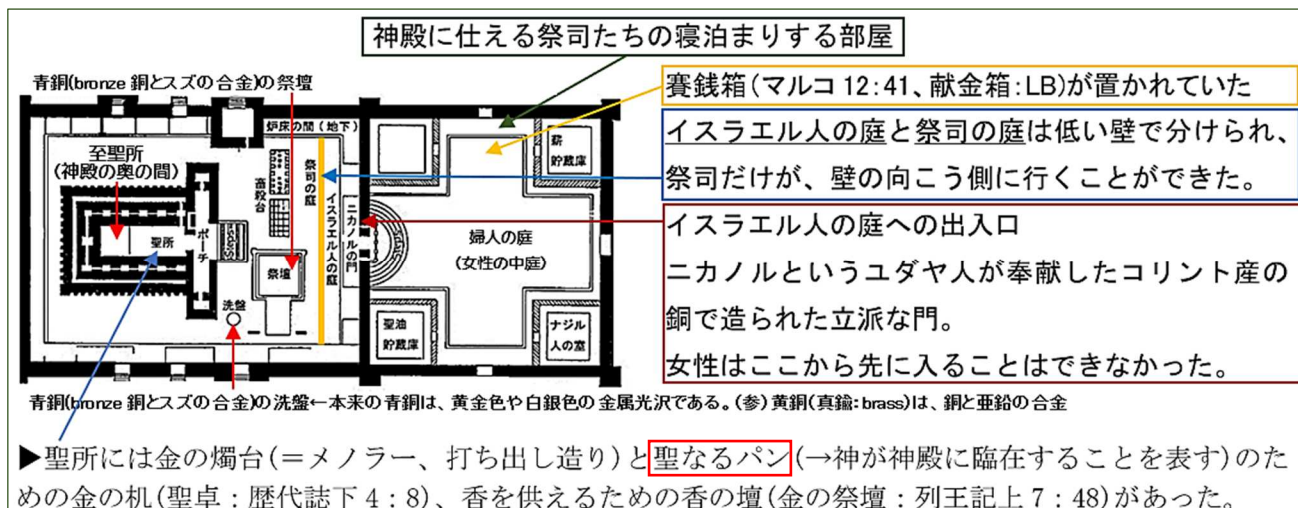


02 ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にはしてはならないことをしている」と言った。

03 そこで、イエスは言われた。「**ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。** 04 **神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。**

→命 > 律法

→ダビデとその従者たちは空腹だったので、神殿からパンをもらって食べた（レビ記 24 : 5~9、サムエル記上 21 : 1~6）。



→このパン（→聖別されたパン）はアロンとその子らのものであり、彼らはそれを聖域で食べねばならない。それは神聖なものだからである。燃やして主にささげる物のうちで、これは彼のものである。これは不変の定めである（レビ記 24 : 9）。

→すなわち、第一の幕屋が設けられ、その中には燭台、机、そして供え物のパンが置かれていました。この幕屋が聖所と呼ばれるものです（ヘブライ人への手紙 9 : 2）。

05 安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。

06 **言っておくが、神殿よりも偉大なもの**（→もの⇒者＝イエス・キリスト）**がここにある。**

07 もし、『**わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない**』という言葉の意味を知っていれば、**あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。**

→わたしが喜ぶのは／愛であっていけにえではなく／神を知ることであって／焼き尽くす献げ物ではない（ホセア書6：6）。

→そして更に言われた。「**安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない**（マルコによる福音書2：27）。

08 **人の子は安息日の主なのである。**」

→安息日といえども、天から来たわたしの支配下にあるのだから（リビング・バイブル）。

**【参考】 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム(=ギリシア風)文化に対して否定的**

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教＝ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食（週2回、木曜日と金曜日）、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者（モーセ五書〈トーラー〉－創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記－を研究する学者）の多くがファリサイ派に属し、聖書（旧約）の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。 聖職者である律法学者（ラビ rabbi）を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシーム（パルシム）」＝「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

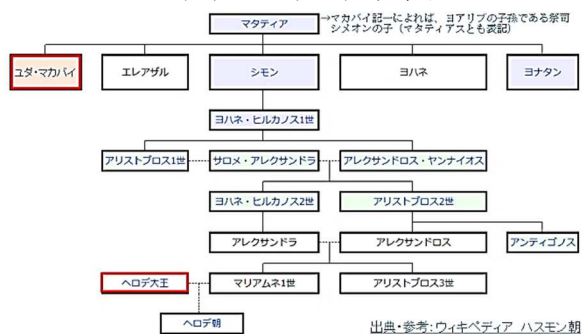
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した（ヨハネによる福音書9：22）。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった（ヨハネによる福音書3：1）。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ（マタイによる福音書26：1～5、マルコによる福音書14：1～2、ルカによる福音書22：1～6、ヨハネによる福音書11：45～57）。

エルサレム神殿の崩壊（AD70年）後はユダヤ教の主流派（神殿に拠っていたサドカイ派は消滅）となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていった。

※1：BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。